

明舞団地街開き 40 周年記念シンポジウム

『元氣な街であり続けるために』記録

主催：兵庫県、都市再生機構、兵庫県住宅供給公社、神戸まちづくり研究所、明舞まちづくりサポーター会議
後援：明舞団地連合自治協議会、明舞まちづくり推進協議会

日 時：2004 年 10 月 17 日（日）13:30～17:01

会 場：明舞センター松が丘ビル 3 階大会議室

参加者：97 名（スタッフ 10 名含む）

司会は、明舞まちづくりサポーターの井崎正也が務めた。

1. 開会挨拶（藤原正治：兵庫県神戸県民局長）

皆さん、こんにちは。神戸県民局長の藤原です。いつもは兵庫県政にご支援ご協力いただき、この場をお借りしましてお礼と感謝を申し上げます。

この明舞団地はできて 40 年経ちますが、当時私は高校生で明石の朝霧町に住んでいました。その時に、まだ人が入っていないまちを自転車で通りまして、本当にすごい未来都市ができるのだと興奮して走った記憶があります。そのまちも 40 年経ちますと、バリアフリーの問題や、住んでいる方も段々と年をとっていかれ、若者が少なくなってくるという問題も出てきます。しかし、ここは自然も残っていますし、交通アクセスも非常にいい。広い道も計画的に通っていき、野鳥もたくさんいます。そういう意味では、本当に恵まれた住環境に立地したまちだということには変わりありません。当時はバリアフリーの考え方はあまり強くありませんでしたから、エレベーターは付いていない、段差は多い、階段は急だという問題があり、改善していかないといけないということもあります。高齢者が増えて若い人が少ないということは、まちとしてのエネルギーということで非常に心配だという点もあります。それから、商業施設も古くなってきました。ちょうど 40 年経ったところで、時代に対応したものに再生していく必要が出てきたと考えていまして、昨年皆さんと一緒に明舞団地の再生計画をつくらせていただいたところです。

今日は、東京の多摩から、先進地に関わってこられた講師も来られていますし、当時の写真やビデオを見ていただければと思いますので、ぜひ皆さん方の知恵を結集していただき、行政と一緒に、このまちを更に元氣なまちにするように共に力を合わせて取り組んでいきたいと考えています。

それではよろしく願いいたします。

2. 街の歴史・団地再生のプロローグ

明舞団地開発時のビデオ上映

【省略】 / 上映したビデオは、兵庫県住宅開発課・広報課（当時）が作成した『明石・舞子ニュータウン 新住宅市街地開発の記録 総集編 1963-1970』を、20 分に再編集したものです。

当時の生活から最近の取り組みの紹介と明舞団地再生計画の説明（原田賢使：兵庫県住宅地課）

【省略】 / 最近の取り組みや明舞団地再生計画等は、ホームページ「明舞団地のまちづくり 情報発信基地！」（<http://hyogo-jkc.or.jp/support/m/index.htm>）をご覧ください。

3. 事例紹介 ～多摩ニュータウンの再生～（小荒井順：多摩まちづくり研究会代表幹事）

まずは、明舞団地街開き 40 周年記念おめでとうございます。これがおめでたい話なのか、そうではないかということは皆さんの活動次第ですので、今後を期待したいと思います。

第四次多摩市総合計画と多摩市まちづくり研究会

私は仕事柄、中央官庁の方といろいろな付き合いがあって、いろいろな提案を出すのですが、それが地元を下りてくるのに 5 年から 10 年かかります。何とか半分ぐらいに縮まらないかと地元に関わったのが運のつきで、今多摩市まちづくり研究会をやっています。第四次多摩市総合計画で市民ワークショップ「まちづくり研究会」が 1999 年 6 月に開かれました。その時に、私が仕事として国に対して提案したことが地元にはどうなのかな、総合的なことを見たいということで、総合計画のワークショップの中に入ったのが最初でした。12 月に基本計画を市に出したのですが、住民が考えて出したものが本当にどのくらい市の政策に反映されているかを見ていくため「多摩市まちづくり研究会」をつくりました。それ以来、市の総合計画の審議会を追いかけたりしながら、5 年も経ってしまったというのが現状です。その頃に本当なら市が、もっと予測的な数値を出してくれれば良かったのですが、なかなかそうはいかずに、実施計画を始めた途端に財政難なので何も動きませんと言うのです。それこそ今更新をどうするかということで、11 月 7 日に市民討論会を実施しますが、討論会そのものの運営を市民でと言いながら、事務局は市の企画課の中でやります。とにかく今後 1 年半がかりで、次の策定をやるという形になっています。ただ言えることは、こういうふうにやっっていながら、なかなか現実問題としては進んでいかないということがあります。

多摩ニュータウンの概要

多摩ニュータウンそのものは、都心から 30～40 キロの距離があります。八王子が 40 キロほどです。多摩市そのものは都心から大体 30 キロで、我ながら都心へ電車で往復 3 時間の距離を 30 年間よく通ったなと思います。今ですと、新宿から多摩センターまで 30 分弱というところ。東西 14km で、幅が 1km から 4km ぐらい、面積が約 3 千 ha の 30 万人都市の計画でつくられました。行政区としては、多摩市がちょうど真ん中で、西が八王子市、南が町田市、東の一角が稲城市になっていまして、4 行政区に分かれています。基本方針では、1 中学校区を 1 住区として 21 住区をつくることになっています。1 住区あたりは 1 万 2 千人で 3 千戸、平均 100ha です。昭和 38 年には何も無い山の中で、地元の人からは、風が強くて住めるわけではないと言われるようなところを切り開いてつくりました。多摩ニュータウンとしての最初の入居は昭和 46 年です。多摩センターの駅はその後の昭和 49 年にできました。平成

多摩市まちづくり研究会多摩市総合計画づくり				
※	1998	99	2000	01 02
99年	6月	第四次多摩市総合計画策定市民ワークショップ「まちづくり研究会」		
99年	9月	「第四次多摩市総合計画 基本構想」まちづくり研究会提言集		
99年	12月	第四次多摩市総合計画策定 市民ワークショップまち研提言集、基本計画		
00年	2月	「第四次多摩市総合計画 基本構想」「多摩市総合計画審議会」		
00年	5月	「多摩市まちづくり研究会」設立 <small>総合計画ワークショップ・第四次多摩市総合計画 基本計画について検討</small>		
00年	11月	「第四次多摩市総合計画 基本計画答申書」 「多摩市総合計画審議会」		

20041017koarai 2

第四次多摩市総合計画更新事業						
※	2004	8~12	2005	1~8 11~12	2006	1
04年	8~12月	総合計画策定委員会 素案策定				
04年	11月	市民討論会実施 運営市民				
05年	1~5月	市民意見聴取 6月上旬まとめ				
05年	1~8月	総合計画審議会 8月下旬答申				
05年	8~10月	総合計画策定委員会 原案策定				
05年	11~12月	パブリックコメント				
06年	1月	総合計画策定委員会 最終案策定				

20041017koarai 4

12年には、現在のような形になっています。

多摩ニュータウンというのは、我々住んでいる人たちから考えてどうなのかと言った時に、どちらかと言うと地元ではなく、都市整備公団と都と一緒に白いキャンパスに自由に絵を描いたのです。そして多摩市の場合は、33年間描き続けられてきました。30年経ちますから建替え問題と開発が同居していて、特に経済的に日本でバブルが弾けた後の10年、今になって国もそうですが、最後の仕上げで投げ出してしまいました。後は皆さんにお任せしますと、任せられる方の受け皿をつくらない形での投げ出しです。ですから私たちは、2~3年前に「まちづくり」問題提起ワークショップをまち研の中で開いていろいろまとめました。昨年は市の行財政改革を追いかけまして、大変なことは分かりましたが、それを何とかするのが行政のエネルギーだと思っています。今日はメインとして建替え問題、それから交通政策と未利用地という形でお話させていただきたいと思っています。

多摩ニュータウン全体の特徴・現状は、自然発生的ではなく100%人工都市で、これはいい面もあり悪い面もあります。自由に描いてしまったプランニングも良し悪しです。インフラは、つくった値段が高いのと同時に更新する費用も高い。日本の特徴ですが、ガス・水道・電気は地下に埋め、別々の時期に舗装道路を掘り返しては埋めます。今、水道に関しては都がやっていますが、整備が終わった段階で多摩市に移管します。市の財政としては、移管後の水道に関わる費用をキープしていますから、ある程度はあります。しかし、数十年後の更新時にどうなるかという心配があります。

ニュータウン全体の特徴、現況

- ⌘ 自然発生的でない、100パーセント人口都市
長短あり
- ⌘ 白いキャンパスに自由に絵を描いたPlanning
長短あり
- ⌘ インフラの更新
値の高いインフラ、更新コスト高い、都と公団の撤退
- ⌘ インフラが整備し過ぎてこれからのメンテ費用
が心配(市の財政難 税金として負担することになる)

20041017koarai

15

建替え問題

建替え問題はどこもそうですが、最初に入ったところは老朽化も進んでいますし、狭いし古いしボロいしということがあります。分譲団地の建替えは困難ですし、建築協定や地域協定の問題もあります。団地ができて10年ぐらいで、諏訪・永山地域の建替えの話を始めなければならないというのは、白いキャンパスに絵を描いたのだけれど、本当にそんな団地をつくって良かったのだろうかと思います。それにしても合意形成がなかなか難しいと同時に、住み替えていくシステムがありません。分譲住宅を買い換えながら次々に移れるような社会システムを税制も含めて考えない限り、無理だろうと思います。管理組合の事業能力が難しいということがありますし、同時に資金の調達に至難さもあります。

諏訪2丁目の団地の概要は、1971年3月の入居から33年経っています。敷地面積が6.4haで、壁式鉄筋コンクリート造5階建てで23棟あります。戸数640戸で、間取りが3DKの均一です。法的規制で、皆さんご存知のように、1団地の住宅施設建ぺい率10%、容積率50%の問題が残っています。入居数は、開設当時は1,800名でしたが、現在は1,200名です。しかし、昔から住んでいる方は10%ぐらいしかいないようです。

この地域をつくり直すと言っても、いろいろな考え方がありますので、それを管理組合がまとめ

諏訪2丁目団地



20041017koarai

19

る作業をしています。ここの建替え問題の初期は、1971 年に入居してから、子どもの成長に従いもっと広いところが欲しいと、1988 年に有志の会が発足しています。高度成長期で土地の値段は上がっているのに、建てて残りを売れば費用が出ると、どうすれば無料で広いところに入れるかを考えていたのがこの頃だろうと思います。それで、建替え委員会が、1991 年に団地の管理組合総会で正式に設置が決まり、都市整備公団への調査やコンサルの依頼、それから行政との折衝で規制緩和などの法制条件改善要求や、開発デベロッパーの募集をしました。その時に考えたのが、数棟をまとめて建替える「ゾーニング方式」です。建替えをするゾーンと土地を売却するゾーン、それから建替えを見送るゾーンを住民の人たちが選択可能にし、売却費用で建築・補修の資金源を出す方式です。一見いいようですが、バブルがはじけるとどうにもなりません。

法改正は結構陳情や何かで時間がかかりますが、10 年後には 30 年以上のマンションが全国で百万戸を超えるだろうということで、2002 年に容積率は 150%まで OK と、2003 年 6 月には全体を建替えるのに 5 分の 4、棟ごとでは 3 分の 2 以上の決議で成立することになりました。なおかつ事業主体に建替え組合が認められると同時に、仮の住宅確保に国や自治体が協力することが義務付けられました。優遇処置として、各種の補助金や高齢者向けの特別融資制度などが新設されましたが、やはり国は直接見てくれません。環境も変化してきています。バブルがはじけて、都心に大量に物件が出ていて都心回帰はものすごいと同時に、大手デベロッパー 4 社が手を引いて出てこないで売却もできません。団地内の変化としては高齢化があります。それと同時にリフォームをするということになってきますと、なかなか調整が取れません。

昨年度にアンケートを取ったのですが、建替え希望が 65%以上ありました。耐震本診断調査では、躯体の劣化の進行で将来の修繕に多大な費用がかかるという結果でした。どうするかということで、今年の総会で「ゾーニング方式」を廃案にしました。そして新しく「建替えを進める推進決議」を行い、国に「優良建築物等整備事業」の補助金を 7 月に申請しています。今までは組合をつくってからでないとなかったのが準備段階からでもお金が出るということなので、総事業費 1,200 万で 3 分の 2 補助です。国が 3 分の 1 で、都と市が 6 分の 1 ずつ、それから組合が 3 分の 1 ということで、8 月 24 日時点で都が国に持っていつています。11 月 21 日に、この地区の組合長さんと呼んで、学校跡地や未利用地の問題のパネルディスカッションや報告会を開こうと思っていますが、その時までどこまで進んでいますでしょうか。今後は、新しい基本実施計画を 3 年以内につくり、2007 年には建替え決議を予定しています。それにしても、ようやく行政が動き始めたというのが現状です。手を引く段になって、今さらですが、市は多摩 2 丁目の分譲住宅建替えを一つの例として考えています。これが多摩ニュータウン、行く行くは全国のニュータウンの再生をどうしていくかという課題として出てくるでしょう。そういう意味では、この申請が全国初だと言うのですから、今後とも注目をしていただければと思います。

交通対策

多摩ニュータウンの南に尾根幹線、北を野猿街道が東西に走り、その真ん中に多摩ニュータウン道路があります。そして鎌倉街道や府中街道などの道路が、縦に何本かあります。そういう意味では車社会で交通量が多く、車椅子で通れるような道路にはなっていません。お金のある元気な時につくりましたから、車椅子がどんなところまで通れるかということはほとんど考えられていないのです。公共交通機関が不足していて路面電車もありませんから、ミニバスを出して運行しています。

そこで一つの実験として、内閣府が募集した全国都市再生モデル調査へ、多摩市が「多摩ニュータウンにおける高齢化社会に対応した移動円滑化方策調査」を応募し、11 月から来年の 2 月までの実験事業として実施します。「のりタク」という予約型の乗り合いタクシーで、基本的にはタクシーの便利さと乗り合いによる運賃の安さがあり、利用者は、平日に在宅している人ということで、リタイヤした人、

主婦、車椅子の方です。幹線道路は谷間に結集していますから、住居地からバス停までスロープで昇り降りするのが大変です。豊ヶ丘のバス停から見た団地の上の道路ですが、階段を上がって、なおかつ5階建てだと、7階か8階か上がらなければいけないのが現状です。ここは法面がちゃんとしていて、昔は何もありませんでしたが、30年経ちますと木が生い茂っています。

この「のりタク」は、多摩センターのエリアと落合と豊ヶ丘の住宅地との間を走ります。多摩センターの駅の方は、病院など5ヶ所に停まる場所

をつくり、団地内では、標識を出すことを考えています。片道300円で、時間帯は午前9時から午後4時半までです。利用するには登録しておく必要があり、一昨日に聞いた話では、130名ぐらいが登録しています。まず電話で予約して乗り場に行きます。乗り場はどの居住区域からも100m以内に設置しています。そして乗せるのは最大3人です。こういう条件をつくってやります。実施後は、利便性や採算性の検証をどういうふうにするのか、タクシー会社は本格実施で儲かるのかということがあります。最終電車は、夜の1時過ぎに多摩センターに着きます。タクシー乗り場で乗るのに2時半ぐらいになるのです。ですから、空いている時間帯のタクシーを使ってやるという形になっています。

未利用地

未利用地の話は、建て直した時の周りの環境をどうするかということで、リザーベーション用地をどういうふうにしていくのということがあります。それと同時に、最初に計画した時点での約束事項をほとんど反故にされてしまうのです。一つの例として、要するに都と国がつくったものですから、多摩市に対して、技術や財政面の支援が今後も必要です。つくったものを多摩市に移管しても、受け取った方はそういう技術も無ければ、メンテナンスもできません。多摩ニュータウンは国の施策としてやった以上、いつまでも面倒を見るということではないのですが、やはり最後のところは詰めていただきたいと思っています。我々まち研としては、「ニュータウン熟成化促進協議会」をつくれと提案しています。市、都、公団、事業者、市民、商工会議所などで設置して、市民委員を5割以上としてもらいたいという提案です。また、多摩センター地区は業務核都の形成の中心としています。近隣センターではいろいろな形で市民やNPOが参加することが必要と考えています。

多摩市の中にある未利用地で、尾根幹線沿いにも開発途上のところがあります。この団地の場合、谷



公団の建て方 法面例1



民間マンションの建て方例1 - 2 (法面)



の部分はバス停の道路の部分です。そうして、法面があって、中に道路をつくって、建物を建てるというのが公団の一般的なやり方です。これだと幹線道路との距離があります。ところが未利用地を売れば、民間のマンション業者はギリギリに建物をつくります。全く景観が変わってきます。ですから民間業者がやる場合に、どういうふうに規制するかという問題があります。やはり法面をうまく残す形の建て方をしていかなないと景観が全く変わってしまいます。これは新しく、今あるものを建て直すにしても、そういう領域が必ず必要になるでしょう。

少子高齢化対策

今年の16年1月1日現在の人口の統計で、老年人口は14.2%です。H17は、実は平成12年に予測した数字で、もうすぐまで着ています。多摩市全体の場合は、2015年には28%ぐらいまでいきます。各団地単位を取ると、もっと高齢化率は上がってきます。ということは、0歳から14歳がいなくなっていき、学校の跡地施設をどうするかという問題も起こってきます。この学校跡地の一番の問題は、市として国庫補助金を、それも特別に多摩ニュータウンだということもあって、受け取っているということです。学校以外の利用をするとなると、地方債や関連公共費も含めて返さないといけなくなります。都市計画上の一団地の制度も問題になってきます。それと同時に、その建物を無償で貸すのはいいのですが、有償では貸せないの、そこで儲けることはできません。こうした制約を外してくれると、ベンチャービジネスも成り立つと思うのですが。

多摩市の人口構成や変化(1)

※人口構成: 各年の1月1日の人口構成

	H12	H14	H16	H17
年少人口: (0~14歳)	13.5% 19,221	12.8% 18,081	12.3% 17,458	12.4% 17,459
生産人口: (15~64歳)	76.0% 107,974	74.8% 105,455	73.5% 104,007	72.4% 102,661
老年人口: (65歳以上)	10.5% 14,981	12.3% 17,403	14.2% 20,040	15.3% 21,771
合計	142,176	140,939	141,505	141,891

20041017koarai 62

商店街の活性化・公園・公共施設

商店街の活性化では、個人商店がほとんど無くなってきて、団地内のお医者さんも潰れています。そういうものをどうしていくかという問題があります。それから公園は広くて緑豊かだけれども、夜になると問題が起こるといことがあります。公共施設は第三セクターでいろいろやっているのですが、第三セクターというのは独立していないのです。財政が苦しいので、どんどん第三セクターだとか指定管理者制度を導入してやっていこうとしていますが、受け手があるかという問題があります。そうすると、NPOは下請けではないと言っているのですが、NPOに任せる、NPOは安くやってくれるという話が出てきます。どちらかと言うと委託契約という概念は、請負ということで出す方と出される方ということになります。今日は県の方がいらっしゃるのご提案しますが、ぜひどこかの県でやっていただきたいというのは、費目で協働費というものをつくっていただきたい。パートナーシップ契約を結んで協働でやる、お互いパートナーとしてやるのだというような制度をつくってもらいたいと思っています。

広域行政・情報

生活圏と行政とがものすごく違うという問題があります。多摩センターを使っている八王子市民は独立して多摩市に入りたいと言っています。ところが八王子市は、そんな話は住民も少ないし市議会とはあまり関係ないというような話で、そういう生活圏と行政区の違いがあります。そういう意味では、本当ならニュータウンをつくる限りにおいては、特別立法で全部が一行政区として運営して初めていろいろなのが成り立つのだらうと思っています。まち研としては、多摩ニュータウンを一つの生活圏とし

て見てもらいたいと考えています。そういう意味では、相互乗り入れという概念があるのですが、大きいところと小さいところが相互乗り入れをするとどうなるかという問題もあります。情報の分野では、お互いの情報を1ヶ所から発信するような公的機関ができると随分違うだろうと思います。ニュータウン全体の情報を見ようとしても、ほとんど分からないというのが現状です。

市民が主役

往々にして行政は、市民に何をしてやるかという話になりますが、そうではなくて、市民が行うことの支援をするという役割に大きく変わるのだということがあり、多摩市職員に市民との協働とはどういうことなのかということ勉強する講習会をやってほしいという話があります。住民の方も、行政に何をしてもらおうかということをお願いします。これは日本の行政のでき方の悪さと同時に、おかしな話ですが、陳情を持ってこない限り認めないという江戸時代からのやり方があります。

行政に何をしてもらおうかということではなくて、行政と共に市民自身が何を行うかということが問われます。そういう意味で、多摩市で頑張りますので、皆さんも頑張ってくださいと思います。

これで私の講演は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

4. トーキングセッション ~元気な街であり続けるために~

パネリスト(以下敬称略)は、田中晃代(近畿大学非常勤講師)、永田三喜雄(明舞まちづくりサポーター)、玉田一成(明舞まちづくりサポーター)の3名の方に、コメンテーターは、辻信一(環境緑地設計研究所)、小荒井順(多摩まちづくり研究会代表幹事)の2名の方をお願いし、コーディネーターを野崎隆一(神戸まちづくり研究所)が務めた。

コーディネーター(野崎隆一)

最初に40年前の若々しい明舞団地の映像を懐かしく見ていただき、続いて小荒井さんから多摩ニュータウンの試みや現状について、辛口も含めてご紹介いただきました。今からトーキングセッションを始めますが、後半には会場の皆さんにも参加していただきながら進めたいと思っていますので、よろしくお願ひします。最初に近畿大学の田中さんより、明舞団地とほぼ同じ時期に開発されました千里ニュータウンでされているいろいろな試みをご紹介いただいて口火を切りたいと思います。

住み続けられるまちづくりを目指して(田中晃代/パネリスト)

大阪府の千里ニュータウンは、豊中市と吹田市にまたがったところにあり、両市が一体となり連絡室を設けて市民のまちづくり活動を応援しています。千里ニュータウンでも建物の老朽化で建替え問題が出てきていますが、緑が一杯育ってきており、老朽化を隠して美しい景観をつくっています。戸建住宅地もあり、敷地が広く周辺の緑も豊富に育ってきています。

・千里ニュータウンの現状

昭和37年の千里ニュータウンのまちびらきから既に40年以上が経過しています。物的環境面では建替えの問題が出てきています。社会的環境面では、コミュニティや文化について、高齢化への対応をはじめとした再整備の必要性が生じてきています。たとえば、建替えによる環境変化については、高齢者の住まい方や精神面でのサポートが必要ではないかとか、若者だけでなく元気な高齢者の働く場を確保するべきではないかとかの話が出ています。更には、福祉サービスを地域コミュニティでやるのは限界があるので、ある程度事業化するなどして充実させる必要があるのではないかという話や、建替え面では特に若者が入れるような家賃設定にしないと、まちは活性化していかないのではないかというような

話も出てきています。

・ 「近畿圏における持続可能なまちづくりに関する調査報告書」

私は、2004年度の国土交通省の近畿地方整備局の委託調査で、NPO 政策研究所が中心につくった「近畿圏における持続可能なまちづくりに関する調査報告書」の研究スタッフで関わらせていただきました。その中で、環境系、まちづくり系、福祉系、子育て系の NPO の方や地域の自治会の方を交えて、7~8人ぐらいでフォーカスグループインタビューをしてきました。その中から課題がいくつか出てきたのですが、地域活動の展開に関する課題が一番多く出てきています。次に住環境に関する課題、生活支援に関する課題と続きます。最後に教育に関する課題が出てきています。

大分類	中分類
住環境に関する課題(26)	「集合住宅の建替え」「公園のあり方」「ニュータウンの緑」「交通」「まちの姿」
生活支援に関する課題(19)	「地域力・商業」「高齢者へのサポート体制」「働く場づくり」
地域活動の展開に関する課題(34)	「コミュニティづくり」「活動・活動の担い手」「行政と市民及び市民団体の連携」
教育に関する課題(12)	「教育」「環境教育」

近畿圏における持続可能なまちづくりに関する調査業務報告書より

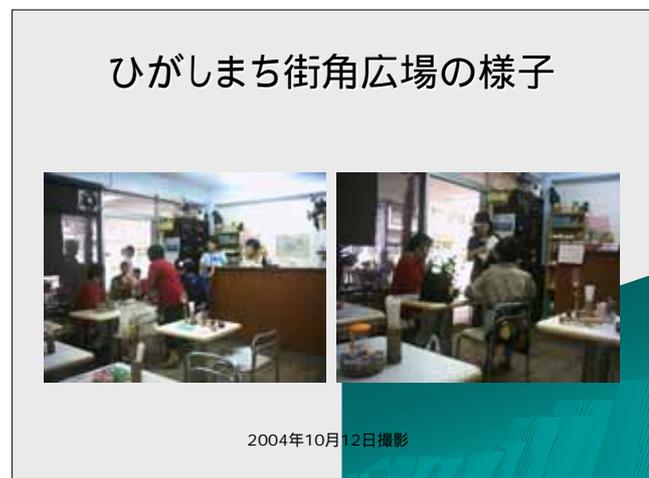
・ 千里ニュータウンで活躍する人々

今日は、「千里ニュータウンで活躍する人々」と題して、住民の皆さんの活動をご紹介していきたいと思います。主にまちづくり活動が行われているのは4つのグループがあります。その一つが「ひがしまち街角広場」です。これは豊中市が平成12年にやった「歩いて暮らせるまちづくり事業」の一環で、「住民による近隣センターの空き店舗の暫定利用と自主管理」という社会実験が行われたのです。それが契機となって街角広場ができました。次に平成13年の40周年記念イベントの一環で開催された市民フォーラムの実行委員会が母体となって「千里市民フォーラム」という組織ができました。あるいは、シルバーの方ばかりを集めて井戸端会議というのをやったのですが、その有志によるバーチャルなコミュニケーションの場として、コンピュータのネット上での「井戸端ネット」というのがあります。最後に、平成15年の吹田市の千里NT再生100人委員会による千里ニュータウン再生ビジョン策定後に設立された「千里まちづくりネット」という団体があります。いずれも行政が仕掛けたものですが、これ以外にもいろいろあり、たとえば地域交流会といって、北千里で商店街の方と一緒にサロンのような感じでいろいろなことを話し合う場をつくられているといった交流もあります。

・ ひがしまち街角広場

ここは、人が集う街角広場ということで、いろいろな世代が集うという場所であるということ、Face to Face の関係を非常に大事にしているということ、それから新たな活動を生み出すしくみがあるということ、緩やかなルールがあるということ、楽しい場所であるということ、最後に公民分館長さんの赤井さんという方がキーパーソンでいらっしゃるということという特徴があります。この街角広場は、近隣センターの一角にあります。周辺のお店で薬屋さんやパーマ屋さんはお店を開けていますが、それ以外は全部シャッターが閉まっています。街角広場の前の部分には掲示板があって、そこに阪大の学生さんが画いた設計図とかを貼り付けているといった状態です。

街角広場の様子ですが、ひがしまち街角広場ができてちょうど3周年で、10月9~10日に3周年記念イベントを実施しました。左の写真は、その



2日後に、私がここに座って1時間ほどコーヒーを飲んでいるところですが、子どもたちが学校から帰ってきて、赤い服を来ておられる方が赤井さんですが、赤井さんがお帰りと言って声をかけているところです。右側は、どこかの大学生だと思いますが、近隣センターについてのアンケートにご記入いただきたいということで、そういう場をつくっているところです。

このひがしまち街角広場は、コーヒーを飲むところがあって休憩スペースになっています。それから、先ほどのような記念イベントをやったり、街角広場の前の広場で、中学生のバトントワリングや和太鼓をやったり、阪大の学生の図面を展示したり、岡山の産地直送の野菜を売ったりと、そういうイベントをしたわけです。これも人が大勢来ていました。それ以外にも地元の人の俳句が貼ってあったりします。私はこの日、数時間しゃべっていたのですが、その間にも住民の方が入れ替わり立ち代り来られわけです。作りたてのお餅なので柔らかいよと言って差し入れが一杯あるといったような、いろいろな人が立ち寄ってくる場所になっています。

・ いろいろな話題が飛び交う千里市民フォーラム

これは、40周年の記念イベントからできた市民団体ですが、決まった場所で決まった日時で行われる井戸端会議を持っています。毎月第3土曜に土曜サロンというのをやっています、ここではいろいろなテーマを取り上げています。たとえば、建替えの問題とか、コレクティブハウスをつくるにはどうしたらいいとか、エンディングノートと言ってニュータウンで最後を終える時の終え方ですとか、千里ニュータウンにはお墓がありませんから、これから身内が亡くなった時にお墓をどうしたらいいのかとかいろいろなテーマの話がそこで繰り広げられています。そういう中で、思いを共有して仲間を増やす仕組みを持っていて、私もそれだったら一緒にやりたいという人が一杯増えてきています。ここは、情報交流の場であって、決して活動は行いません。そういうふうには仕分けがされているのではないかなと思います。この千里市民フォーラムにも何人かの複数のキーパーソンがおられます。

また、土曜サロンに学生さんが来て、建替えに関するアンケートをやりたいのだけれどということで、別途そういう会議を持ちました。「いわせてもらおう！ウチらの団地」ということで佐竹台の地区ですが、住宅の建替えワークショップをやって、新しく建物が建て替わったらどうなるのか、コミュニティは一体どうなるのかということの話し合いがされています。

・ 井戸端ネット

ここもやはり、コンピュータのネット上でホームページやメーリングリストを使って、いろいろな人が参加できる仕組みを持っています。バーチャルなコミュニケーションを中心にされているのですが、広く応援団をつくる仕組みを持っているということです。ただバーチャルだけではということで、実際に顔をつき合わせて会うこともあるということです。千里ニュータウンにテーマは限らず、非常に広域的な話題についても情報交流をされています。ここでも、やはり加福さんというキーパーソンがおられます。

・ それぞれの思いを大切に千里まちづくりネット

これは吹田市が100人委員会を募集して、千里の再生を考えるビジョンを作成しました。その後、解散するのはもったいないということで、千里まちづくりネットができたのですが、実は私もここでお手伝いしています。ここには、ホームページをつくる会があったり、近隣センターの活性化をどうしたら

住宅の建替えワークショップの実施



2004年9月25日撮影

いいのかという会があったり、あるいは住まいを助け隊という会があったりと、いろいろな会があって、それぞれ担い手がおられます。それでその担い手の方々の思いを実現するような仕組みを取っています。

住まいを助け隊というのは、ニュービジネスとして、これからビジネスにしていくような仕組みを持つのではないかとということで始まりました。たとえば住み替えです。戸建の一人暮らしの高齢者の方で、戸建だと管理が大変で防犯面でも嫌なので集合住宅に替わりたいという人がいるとします。逆に集合住宅にお住まいの若い人で、戸建に移りたいと思っている方があれば、その人たちをマッチングするというようなことですが、あるいはそんなに大きなことでなくても、家のシステムキッチンの乾燥機が壊れたのでどうしたらいいとか、高齢者なので電球を付けられないのでどうしたらいいとか、そういう住まいの身近なことについて相談する窓口があるということです。いずれはビジネスとして展開していけるのではないかと考えているそうです。

ここは、常に中立的な立場を貫いています。この前も建替えのミニフォーラムをしたのですが、賛成の方もあり、反対の方もありということで、非常に中立的な立場を貫いています。ここでもやはり複数のキーパーソンがおられるということです。

・ まとめ

最後に、住み続けるということを前提とした場合、物的な環境を支えるためには社会的な環境をいかに充実していくかということが大切ではないかということと、ニュータウンでは少子高齢化が課題としてあげられています。全国平均では大体高齢化率というのは20%弱ですが、千里は22%です。地方の農村部から比較すると、それほど高いというわけではないのですが、その高齢化する速さが5年間を取ってみてもすごく早いということが問題だと思えます。しかし、先ほどリタイヤしたというお話がありましたが、リタイヤした熟年層の方が多いということは、地域活動に時間をかけられるということや、経験や知識が豊富だということが、逆にまちづくり活動にとっては非常にメリットではないかと思えます。少子高齢化が問題だと言われていますが、千里ではそういう65歳以上の熟年層が元気にまちづくり活動をされていて、生き生きとしたまちになりつつあるというような事例をお話しました。

どうもご静聴、ありがとうございました。

具体的な取り組みのイメージが出てきました。物的に建物をどうこうする前に、社会的な環境整備が大事だというお話だったと思います。その中でも、活動の中からいろいろなキーパーソンが現れてきたというお話がありました。明舞のサポーター会議の中でも、そういうふうになっていけるのではないかと思う方が何人かおられます。それでは、地元の方からご発言いただこうと思うのですが、まずは南多聞台の戸建住宅にお住みの永田さんに、今日の映像や、その後の話を聞かれて、この40年の時間の流れと地域の変化や、その中で発生してきた課題についてお話をお願いします。

まちづくりのキーポイントは住民の意識改革（永田三喜雄 / パネリスト）

私はこの団地ができる前から、西舞子に30年ほど住んでいましたので、ここでお世話になって40年ほどになります。先ほどから映像や講演の中でも度々出てきましたが、やはり皆さんが思われるように、少子高齢化の問題、建物の老朽化の問題、あるいはバリアフリーの問題、行政区画が明石市と神戸市とにまたがっている市民行政の格差の問題を感じています。

昔から事業は人なれと言われますが、まちづくりも地域住民の人づくり、言葉を変えれば意識改革がキーポイントの一つになるのではないかと考えています。最近よく聞かれる住民と行政の協働という言葉ですが、昔のように住民が行政にお願いして、行政に頼るという時代ではありません。日本経済もゆとりがなく、いくら要望しても絵に描いた餅になることが多いと思います。やはり自分自身のまちのこ

とですので、私たち住民は経済的な能力もありませんが、知恵を絞り自分が行動に参加して、小さなことでも自分にできることをしていきたいものです。

今の時代は、地域のことや公益のことを余りわきまえずに、自分の権利や利益を主張しすぎるのではないかと思います。そうではなくて、人として生まれてきた以上は、私も程なく迎えが来ると思いますが、その時になって自分の人生を振り返って、世間様にお世話になった利子の分ぐらいは返してきたのだろうか。やはり決算をする時に、余り寂しい思いをしたくないと思っています。ですから自分たちのことは、金をかけずにすむことは、あるいは若干の負担であっても、結局は地域に還元されて自分が幸せになるわけですから、やはり汗をかく、痛みを分けるといぐらいの気概を持ってかかりませんか、結局一部の人だけが活動したのでは、とても実現できないと思います。やはり住民がいかに参加するか、そして意識づけをどうするか、そして一人の人でも多くの人自分自身の問題としてまちづくりに参加するということが無ければ、この明舞の活性化も絵に描いた餅に終わるのではないかと思います。具体的な提案は後ほど発言させていただきたいと思います。

私は明舞に住んで満足しています。九州出身ですが、ここで骨を埋め、今度も生まれ変わってもやはり明舞に住みたいと思います。こんなにいいところはありません。どうか皆さん、自分たちでできることをやって、より少しでも住みよい心の豊かな明舞のまちづくりと一緒にやっていただけたらと願います。

熱いエールを送っていただきました。もう少し課題をお話されると良かったのですが、明舞団地に非常に満足され、愛を持っておられるということだと思います。それでは続きまして集合住宅にお住みの玉田さんに、7月31日のマンション管理組合ネットワークの設立にも関わられたと思いますが、課題やマンション固有のいろいろな問題をお話いただければと思います。

マンション管理組合ネットワーク（玉田一成ノパネリスト）

明舞団地は大きく分けて、戸建住宅と集合住宅の二つに分けられます。集合住宅は分譲住宅と賃貸住宅に分けられ、賃貸住宅は、県住と機構、前の公団住宅に分けられます。その中で、分譲住宅のこれからの課題に私は直面しているわけです。明舞団地全体の話ではありませんが、分譲住宅である16の団地の課題です。後から分かったのですが、県の住宅供給公社以外の分譲住宅もあります。

この中のほとんどの団地が今から管理組合をつくることとなります。日本の常識では、入居者が入った時点で管理組合ができるのですが、明舞団地の場合はいろいろ理由があり、築35年後で管理組合ができるのです。これが私の一番の課題なのです。35年間ここに住んでいましたが管理組合がありませんでしたので、最初は何のことが分かりませんでした。分からなければ、神戸市内に約2,500あるマンションの管理組合に聞けばいいのではないかとということで、神戸市マンション管理組合ネットワークをつくり、私もその中に参加させていただきました。これは神戸市の管理組合の集まりです。ここは明石と神戸市との両方があり面倒なので、明舞団地の管理組合ネットワークをつくらうという私の発案で、7月31日に1回目の交流会をやりました。実は今日のシンポジウム終了後の5時半から、2回目の集まりを持ちます。

今後の課題としては、管理組合ができてから最初に我々が直面することは団地の再生です。築35年で建物はかなり古くなっています。人間で言えば60歳で、普通だと人間ドックに入る年齢です。管理組合ができてすぐに、改修なのか修繕なのか、あるいは建替えなのかに直面するわけです。そういう再生というものは、自分の団地だけを考えればいいというわけではありません。やはり明舞団地全体の、戸建住宅や賃貸住宅の建替えも含めて大きな視点も必要ではないでしょうか。こうしたことが、今後の明舞団地の一つの課題だと思っています。

私がここに住み始めたのは、当時まだ学生であった 35 年前です。生まれ故郷も好きですが、ここは学生時代から住んで、その後独立して、こちらも好きです。これからも住み続けますので、死ぬ時に良かったと思うような団地環境をつくれればと思っています。

マンション管理ネットワークをつくられたのですが、先ほども千里の井戸端ネットの話がありました。そういうネットワークを組んでいくのも、まちづくりの導火線になるような動きだと思いますので楽しみに見えています。それでは続きまして、これまでワークショップ等でお手伝いをいただいている辻さんにコメンテーターとして来ていただいています。専門家の目として、外部から見た目で、今の明舞団地の課題や、こうすればいいのではないかとということをお話いただければと思います。

公園や道路のバリアフリーで、まずは皆でやる経験を（辻信一 / コメンテーター）

ワークショップのお手伝いをさせていただいた時に、このまちのいいところや悪いところ、明舞センターをどうするのかとかいうようなことを、いろいろご議論いただきました。その中で、先ほどのお話のように住民の方は、環境が非常に良い、空気が良い、海が見えるというように、本当に良いまちに住んでいるという実感があります。それに対して、まちはできた時のままで、変わったのは木が大きくなり、住民が年をとり、センターのお店が変わり減っていったというだけというような意見があります。

まち歩きをさせていただいた結果でも、公園緑地や道路などの公共施設部分の形は老朽化した部分はありますが、基本的にものの考え方がそう変わっていないと。バリアフリーやユニバーサルデザインというような思想が充分浸透できていないという感想を皆さんが述べられました。当時の若かった頃は、階段の 20 段や 30 段はどうでもなかったですが、今は 1m の高さを上るのに大変苦労しなければならない。そういう意味では、公共施設部分のバリアフリーを何としなければなりません。たとえばこのセンターの向こうの神戸側から反対の明石側の団地へ行きたくても、デッキを渡って階段でしか行けません。当時はそれで良かったのかもしれませんが、今はどうしようもないということが非常に鮮明に指摘されたと思います。

それで、大きくこの団地の土地利用のことを考えると、公共スペースとして、道路、公園、緑地などと、共同住宅の敷地と戸建住宅の敷地、そしてこのセンターがあります。それぞれいろいろな課題があると指摘されています。その中でまずは、一番目立つ公園緑地や道路のバリアフリーについての考え方をもう一度見直してはどうでしょうか。

公園も賞味期限があるのです。樹木も、最初はたくさん植えるのです。40 年も経つと樹木がどんどん育ち、密度が高くなりすぎるのです、間伐というのが森林経営の中で言われていますが、木を切る勇気も必要になってくるのではないのでしょうか。団地を再生するということは一挙にできないかもしれませんが、分譲マンションの建替えも難しくなかなかできません。そういう意味では、皆でやるという経験をあまり傷が痛くないところで経験する。たとえば、公園をやり変えるというようなことを、皆で考えてやってみれば良いと思うのです。公園のやり変えは役所がお金を出してくれますから、あまり皆さんの懐は痛みません。皆で少し苦労すればできるかなというようなことですので、まず経験してみることで、一歩先へ進むことができるのではないかと思います。公園とバリアフリー、道路とバリアフリーを一度ネタとしてやっていただければと思います。

難しいことに取り組む前に、一度練習問題をやってみようという話でした。そういう意味では公園などは本当にいいですね。それでは、先ほどお話をいただいた小荒井さんに、住民の方もお話いただいたので、その辺で感想をお話いただければと思います。

何をしてくれるのかではなく、何をしていくのか（小荒井順ノコメンテーター）

住めば都という言葉がありますが、長く住んでいるとそこが都なので、そこを何とかしたいと切実に思うのです。多摩ニュータウンの人たちも、結果的にはほとんどがそう思っているのではないかと思います。それこそ多摩ニュータウンの場合は、ここよりも短い期間で、なおかつ開発途上で、片側で老朽化の話があり、人間も老朽化して元気が無くなってきて、さあ今どうするのかと。それで去年、「お父さんお帰りなさい」という事業を八王子でやりました。今多摩市の公民館と社会福祉協議会、商工会議所などが集まって、秋に何かイベントを打とうということで話し合っています。定年でリタイヤして戻ってきた人を対象者とします。行政はそこまで準備しなくてはいけないのかと思ったのですが、やはりいろいろな意味で人なのです。それぞれが持っているエネルギーを、その地域に活かせるような方法論をつくっていかねばいけません。ニュータウンでなくてベッドタウンに、家に寝るだけに帰ってくるような状況であった人たちが地元へ戻ってきた時に、やはり何か手立てが要るのだろうと。その手立てをした時に、先ほど辻さんからお話がありましたが、簡単ではあるけれども何か一つのことを皆でやってみる、お互い協働で何かをするのだということから始まります。多摩の永山団地の中に福祉亭という施設があります。去年までは、市が年間400万ぐらいの補助金を出して運営していたのですが、財政が厳しくなると支援をストップしました。集まっていたメンバーは、仕方がないのでこのままやろうということで、集まる人だけ集まって今でも続いています。やはりやればできるのだということ、皆でやる必要があるだろうと思います。

実を言いますと、私はまちづくり研究会をやりながら、多摩NPOセンターと言うか、NPO協会の理事長もしていて、56団体が集まっています。始めは多摩NPOセンターを支えるために、15団体ぐらいでつくったのですが、段々メンバーが増えると、自分たちに何をしてくれるかを問うようになってきます。そうではなくて、地域に対して何をやるかということをも問ってもらいたいのです。そういう意味では、バリアフリーもそうですし、グローバルデザインもそうですし、先を見越した考え方を持たざるを得ないだろうと思います。国内ばかりではなくて、北欧あたりを見るのが一番それに近いという気がしていますので、そういうことも考えながら頑張っていたきたいと思います。

協働というお話が出たり、してほしいではなくて何ができるかだというようなお話しになってきました。今日のテーマが「元気な街であり続けるために」ということですので、ここからは、いろいろ提案を出していただきたいと思います。千里の4つの動きを紹介いただいたのですが、コンピュータのネットワーク以外の3つは明舞でも始まったという状況で、それを使って何をやるのか、何をを目指すのかというあたりだと思います。再び地元メンバーに話を受けたいと思うのですが、ワークショップなどで課題がいろいろ出てきて、これから具体的にこういうことをやってみたらどうというようなアイデアがあれば出していただければと思います。玉田さん、続いて永田さんをお願いします。

合意形成と広報活動（玉田一成ノパネリスト）

一番大事なのは合意形成です。集合住宅ですから皆さんの意見が一致することが大切です。特に管理組合の運営の場合は個人の所有権がかかっていますから、この合意形成をきちんと行わずに何かをやった場合は法律違反になることがあります。元気な街というのは、合意形成に必要な大事な一つです。

一般的に、元気が無いとか、問題があるとかと言うのは、私は理由が4つあるのではないかと思います。住んでいる皆さん一人一人の無関心、無責任、個人主義、それから行政への依存症です。これらができるだけ無くすと、合意形成も得られやすいのではないかと思います。そのためには、広報活動が一番大事です。何をしようとしているのか、何をやっているのか。これは行政からの広報も必要ですし、あるいは我々サポーター会議が何をしようとしているのかの広報も大事です。明舞団地の人口は2万人

ぐらいですが、その内の 70 人ぐらいが今日にお集まりですが、ここにおられる方々は無関心、無責任では全く無い方だと思います。それと、ここにおられる方は、それぞれ自分の地域や団地や自治会で何らかの役員をされた経験がある、あるいは現在やられている方が多いのではないかと思います。この方々は、広報の大事さというのを良くお分かりだと思のです。いくつかのまちの街区が一つの単位で自治会ができていますが、その一つの単位の中での広報をきっちりやっていただく。たとえば県で何か広報する必要があった場合、2 万人に同時に広報するというのはなかなか難しい。ですからそれぞれの単位の自治会や、その役員さんの協力というのは、課題解決の一つの資産だと思のです。

合意形成ということでお話いただきましたが、この合意形成するためには皆で情報が共有できていないといけません。そのためには日頃の広報が大事で、できるだけ身近なエリアでのニュース発行のようなものが大事ではないかというご提案だったと思います。それでは、永田さんをお願いします。

アイデア募集と人的資源の活用（永田三喜雄 / パネリスト）

住民の意識づけと体制の拡大ということで、それぞれ 2 つほど提案してみたいと思います。

まず意識づけの一つ目は、住民からの具体的な推進方策です。提案していただくのですが、ちょっと工夫を凝らして、神戸新聞と行政にもお願いをして、年度単位で小学生から高齢者に至るまで皆さんから、知恵を絞ってあまり金を使わずに実現可能なアイデアを出していただくと。優秀作品については、知事賞とか市長賞とかで大いに顕彰していただいて、新聞や行政機関の広報にも掲載をして、皆さんにも PR して関心を持っていただくというのはどうかと思います。二つ目は、今でもまちづくりに有志の方や住民組織の方に非常にご苦勞いただいておりますが、人口の総数に比べての参加率となると、ごくごく一部の方に限られており、ほとんどの方は無関心というのが実情だと思います。これは自分自身の問題として、行政に対して公正な中立な立場で道義にかなったような要望や陳情をする。場合によっては住民の活発な署名運動で、立法などの請願をして行政に注文し、言い放しではなしに経緯も追跡・検証して、行政が怠けていればあきらめずに繰り返して要望すると。住民の正しい要望や意見を一部の人だけでなしに、署名運動などをする事で皆に関心を持っていただき意識を盛り上げていくのはどうかと考えています。

体制づくりの面では、今でも単位自治会や老人会とか婦人会、それぞれの地域の団体や同好会などの方がまちづくりに参加されていますが、この底辺をもっと広げながら、あらためて同好会を結成するなどして、市民の気心の合った人たちで小さなことでもやっていけばどうかと思います。今一つは、明舞団地にはたくさんのお見識や優れた人格を持っておられる方がたくさん住んでいます。その方たちを、各団体や自治会から推薦していただいて、明舞のまちづくりアドバイザーの位置づけで、行政とも相談の上、アドバイザーの委嘱をしてもらう。この方々の優れた見識や知識をまちづくりに活用してもらい、お手伝いしていただくことも一つの方策でないかと思います。



今日も一部若い方もおられますが、ほとんどが熟年層です。けれども我々熟年は、若い人には無い豊かな経験や知識、それから生まれる知恵に加えて時間的なゆとりという大きな武器があります。若い人は仕事や子育てで精一杯で、気持ちがあってもとてもそこまで手が回らないというのが実情だと思いますので、まだまだ老け込まずに若い人の先頭に立って、我々が一生懸命汗をかいて、後輩に良い手本を自分の後姿で示していき、この退廃した日本の世相を、少なくとも明舞団地を少しでもより良いまちにしていきたいと思っています。

玉田さんからはニュースづくりの話と、永田さんからは小中学生を含めてのまちづくりアイデア募集、地域の人的資源を活用するようなシステム、人と人が知り合うきっかけになるような活動を起こしてはどうかというようなご意見がありました。それでは次は田中さんに、千里とかに何かそういうヒントになるようなことがあれば、お話いただこうと思います。

皆で楽しく話し合える場の共有を（田中晃代／パネリスト）

私からは二点あります。一点は、このまちをどうしたらいいのかというまちの姿を、皆で話し合える場所が共有できればいいと思っています。千里の場合は調査の一環で、行政、事業者、公団、住民の方を合わせて30人ぐらいの人たちでプラットフォームをつくって話し合いをしたわけです。そうした共有の場を持つということが大切ではないかなと思います。先ほど玉田さんから管理組合ネットワークのお話がありましたが、実は千里でも、ある団地で駐車場を設けるのだが、1階にお住まいの方が絶対反対だということで、管理組合に対して裁判をするという話がありました。同じ敷地内での揉め事を反対か賛成かということで、裁判で解決しようということです。これは、たとえば敷地を広げるとか、まち全体を見て別の空閑地に駐車場をまとめて取るとか、あるいは近くのレンタ会社と管理組合が提携して団地内の敷地内に駐車場を設けないようにするとか、いろいろな方法が出てくるわけです。それもどんなまちにしたいかが前提にあることなので、そういう共有の場が管理組合ネットワークでもつくられたらいいという気がします。

もう一点は、人が無関心であるとか、人が集まらない、参加しないとよく言われるのですが、ひがしまち街角広場を見ていると、何か楽しんでその場所に行っています。お互いが無関心でも、そういう場所に行ったら話し合えば、干渉せざるを得ないと言うか、赤井さんもですが、すごく干渉してくるわけです。若いお母さん方でも、干渉してくるのを段々と受け入れてくるような感じになってきています。子育ての上ですごく悩みを持っていたりするので、年配の方から話を聞いたりして、いかに楽しい場所をつくっていくのがポイントだと思っています。

質疑応答

ここからは会場も含めていろいろご意見を伺いたいと思います。小荒井さんの話に質問時間を設けていませんでしたので、その質問でも結構ですからご意見なり質問がありましたらどんどん進めていきたいと思っています。

< 公園について >

(発言) 辻さんにお聞きしたいのですが、公園を再開発しようとした場合に、3つポイントを挙げるとすればどういうところから挙げますでしょうか。

(辻) 先ほど一つ言いましたが、木が大きくなりすぎているということ。それから公園施設の中で遊具の老朽化というのがあります。それとバリアフリーです。松が丘公園をイメージしています。

(発言) 40年経っていますから、細かった木が本当に大きくなっています。県に申し入れているのですが、なかなか間伐ということを受ねたりと受けてくれないのです。間伐による防災上の治水力、雨の流れが大きくなって軸が折れるということも言われるのですが、その辺はどうなのでしょうが。

(辻) 場所によります。東谷公園は傾斜がじゃなり急なところがあり、木が減ると浸食が起こる可能性があるという話ですが、そうかもしれませんし、そうでないかもしれません。現場を見て、ちゃんと話をしないと仕方がないです。技術的に見てそうだと言われれば、そうかもしれません。だけど、育つまではそうではなかったのです。先ほどの映像でも、最初の東谷公園は地肌が出た感じでした。やはり適宜木を切った方がかえって山はいい山に、安全な山になると思います。六甲山系グリーンベルト整備事業もちゃんと森を管理しようという発想でやっているのです。里山も、人が入って管理するからこそ安全な明るい生産的な森であり続けるわけなのですが、そういう視点で、もう一度考えてみるべきだろうと思います。それは垂水建設事務所と議論した方がいいと思います。

(野崎) まち歩きの際に、子どもが遊ぶ昔の公園のイメージが非常に強いので、高齢化してくるに伴って憩いの場所として整備しなおしたらどうかという話が、皆さんから随分意見が出ていました。

(発言) 公園は市が管理しているものがあり、公園を整備してほしいと市に働きかけても、県との連携が無くてうまくいっていないということを聞いたのですが。

(辻) 公園は明石も神戸も市の管理です。県へ言っても何の役にも立ちませんので、市に言いましょ。神戸市の場合は公園管理会があり、東谷公園でも矢元台公園もあります。そこが普段お掃除されていますので、そういう方を中心にやると話が早いと思います。一生懸命やっておられる方抜きに、頭ごなしに関係ない人が行くと、やっている人は何なのだということがありますので、その辺のコミュニケーションをきっちり取っていただくことを切にお願いしたいと思います。

(小荒井) 公園管理には二通りあり、一つは市が業者に委託している管理と、その業者が大きなことをやる間を地域の人たちにサポートしてもらっている管理があるのではないかと思います。逆に言えば、業者に頼んでいることをどれくらい住民に任せられるのか。その辺を埋めていけば、それこそ住民が受託してやっていこうかというような関係はできるのだらうと思うのです。そういう人たちの養成も含め、多摩市にはグリーンセンターというのがあり、そこで講習会を受けて地域でやっている人たちもいます。それは多分地域で何とかしていこうという発想が必要だと思います。

< バリアフリーと法面の緑 >

(発言) 私が住んでいる松が丘は、坂と階段と緑のまちだと思っています。緑のまちは非常にいいのですが、坂と階段については、こういう超高齢社会になりますと非常に問題です。結局、バリアフリーという問題が出てくるのですが、これは全て行政や事業者に関係してもらわないことにはどうにもできません。これをいかに進めるかということで、これからいろいろぶち当たるということになると思います。緑の方では、非常に緑がたくさんあります。その緑も公園は別として、それぞれ事業者が持っている斜面と言いますか、法面に非常にいい緑があったのです。それが今、非常に荒廃してきています。これをまちの仲間と一緒に、段々と緑化していかなければいけないと思っているのですが、そういうやり方について何かアドバイスをお願いしたいのですが。

(辻) 実はこの松が丘地区へ県のアドバイザー派遣で行っていますが、以前から地域の方々とその議論をしています。明舞団地の周辺緑地は担保されます。それ以外のところで、民有地の斜面がいくつか残っていて、景観的にも境的にもいいのだけれど、いつ開発されるか分からないのです。要は、他人地に規制をかけるという大胆なことを考えなければいけないということで、緑地系の話としての保全策を講じるか、開発規制をかけてしまうかという非常に難しいところです。今のところ、答えは無く、お願いしなくては仕方がない。それを担保しようとすると、公共での買い上げへ行き着



かざるを得ないというのが現状だと思っています。

(野崎) 先ほどの小荒井さんの報告の中でも、斜面地を民間へ売って大変なことになっているという例がありました。そういうのも参考にしながら皆さんで考えていけばと思います。まち歩きの時も、タンポポを斜面地に植えているところがあり、地域の方がいろいろなアイデアでやっておられます。そういうモデルがいくつか出てくれば面白いと思います。

< 若い人を引っ張り出すには >

(発言) 今日、非常に興味深かったのは、都市工学的な建築的な部分と、どんなに住民の方が参加されるのかがすごく重要なのだらうと拝聴させていただきました。今日来られている方が、自治会活動をされている方が多いのではないかと言われましたが、たとえどんなふうに、皆さんにこういうことがありますよとか、明舞まちづくりサポーター会議のことを紹介されているのかなと思うと、非常にその部分が興味深いと思います。私は比較的この中では、多分若年層に入と思うのですが、どうやればそういう若い人を引っ張り出せるような環境ができるのかということ、明舞の方にもお伺いしたいですし、小荒井さんや田中さんから教えていただければと思います。

(野崎) 先ほど田中さんから、楽しそうにやっていると人は基本的に集まってくるという話がありました。明舞でもまちづくり広場をセンター内でやっています、やはり地域の人がいる時には人がたくさん来るということがあります。皆さんから、あの場の運営の仕方やアイデアを出していただければと思います。そういうことで、会場の皆さんの方で答えていただいてもいいと思います。

(小荒井) 若い人はなかなか集まらないのです。遊びに行くのは遠い方がいいと、都心の方へ行ってしまいます。しかし、関心を持ってきている人はいます。我々まち研へも、明治大学の学生がインターンシップで来るようになって2年目になります。後は、フリーマーケットをやると結構若い人が来るのです。多摩市の中でも、駅の雨が降ってもいいような場所で、5月や9月にやっています。駅の近くの何ヶ所かでいくつかの団体がこじんまりとでもフリーマーケットをやっていると、若い人も結構参加してきますので、そういうこともあるかと思えます。

(田中) 千里では、ネットさんがテーマ型の話し合いをしているのですが、そこには自治会活動をされている方も入っています。基本的にテーマ型は面白いから皆が寄ってきます。汗をかく自治会というのはなかなか担い手が少ないということがあるのですが、その自治会の方とテーマ型の方が一緒になって話し合うことによって、自治会ってそんなことをしているのというような話し合いになります。テーマ型、特に子育てのテーマに関することなどは若い人たちも入っているので、30代のお父さんとかも関わりながら、その自治会の大変さを知っていきます。やはりテーマ型の人と自治会活動をやっている人が一緒になる場をつくっていかないと、楽しいだけでは駄目だということですね。

(発言) 僕は460戸の自治会会長をして、まちづくりに一応参画させていただいています。例会が月1回あり、できるだけ回覧を作成して回しています。回覧といっても5階建てですから、一つの階段に10戸あるわけで、そこを回すのに何日かかると思えますか。本当に長いことかかるのです。興味

のある人は閲覧して捺印して、すぐ次の階に送るということもあります。関心の無い方は遅い。この関心の無い方に関心を持たせる方法をいろいろ考えていますが、非常に難しい。一応地域住民へはそういう方法で、まちづくりや取り組んでいることを、自治会や例会を通じて行っています。

< 高齢者の孤独死 >

(発言) 暗い話で申し訳ないのですが、皆さん孤独死を見つけたことがありますか。公営住宅で、65歳以上で年金一人暮らしの方は非常に多いわけです。明舞団地だけでも、県営住宅は千世帯を越えると思います。孤独死を発見するのにどうしたらいいと思いますか。民生委員が回るとしても非常に人数が多い。階段の人が、新聞などを見て確認してくれるかと言えば、なかなかそれもできない。今年になって2回、僕の団地から孤独死が発生しました。非常に寂しいです。元気な街でありというスローガンは非常に嬉しいけれども、元気な人は出て行き、そうでない人が独りこもるのです。それをいかに助けたいか、いかに皆で出てきてもらうことを本当に考えていただいたらありがたいと思います。そういう中で明舞団地の活性化をやっていかなければならないのです。本当の弱者の人たちが、明舞団地に住んで良かったと思える方法を、バリアフリーも何もかも結構ですが、もう一つ踏み込んだことができないかなとお聞きしていました。

(野崎) 今言われたことは、同じところに住んで、お互いのことを思いやって生活していくための基本的なところを触れられたのだと思うのですが、そういうことがまちづくりにつながっていくと思います。具体的にどういう形でそれをやるかというのは、皆さんでいろいろアイデアを出していかなければいけないし、今もいろいろな団体が災害公営住宅でいろいろなことをやっていますが、そういうことを皆で勉強するとかも必要かもしれません。

(発言) 明石市は安否確認ということで、ヤクルトを週に2回渡しています。それは70歳以上のご希望の方だけで、ヤクルトの配達の方が安否確認を取っています。それと民生委員が65歳以上の独り暮らしの人を掌握して、なおかつ対面して、もしものことがあればドアを破って入って安否確認を取っているわけです。でも、65歳以上の方の確認を取りに行っても、正直に答えてくれない人もいますので、非常に難しいのです。

(田中) 高齢者の孤独死のお話は、私も実感しています。千里で、お独り暮らしの方にお弁当を600円ぐらいで宅配する配食サービスをNPOがやられています。あるところに集まることができない人たちもいるので、そういう人たちにお弁当を配っています。お弁当を配るだけではなくて、お独り暮らしの方が元気にしているのか、体調は大丈夫なのかと、見守りという形で行かれています。行った次の日に亡くなられたということもあり、すごく辛い思いをした方もおられます。ですから民生委員だけに任せておくのではなくて、民生委員やボランティア、NPOの人が、もしそういう現場に居合わせた時、たとえば具合が悪くなった時にどこに連絡してどういう対処をすればいいかというようなことが分かる共通の紙を1枚持っておくとかいう方法もあると思います。でも、お話を伺っていても非常に難しい問題だと思っています。

トークセッションのまとめ(野崎隆一/コーディネーター)

後半に深刻な話が出てきましたが、そろそろまとめたいと思います。

自分たちでできることを見つけて、実際にやってみることが大切だというお話が出ました。それで何かを達成すると、皆さん自身が元気になるということもあります。そういうプラス側のサイクルで、まちの再生ができればいいと思いました。具体的なアイデアとしては、できるだけニュースの発行をやればどうかとか、まちづくりのアイデア募集であるとか、それから地域のいろいろな人的資源を集めて皆で共有すればどうかとかいう話もありました。特に緑のことでは、ニュータウンはいろいろ問題も

ありますが、計画された良さと言うか、外部空間は非常に豊富にあります。40年経っているわけですから、そうした公園についても見直してもいいのではないかということで、そういうことを契機に皆で知恵を出しながら、楽しく合意形成を、練習問題として取り組んではどうかという話もありました。

明舞のまちづくりは始まったばかりで、サポーター会議も始まったばかりという状況です。まちづくりというのは課題が無くならないかぎりには終わりが無い活動だと思えますので、今日のフォーラムをバネに皆さん頑張っていたいただければと思います。つたない進行でしたが、ご協力ありがとうございました。

5. 総括コメント（小森星児：ひょうごボランティアプラザ所長）

今日はいいお話を聞かせていただいて、元気も出だし、これではいけないということも気付かせていただきました。まず何よりも、今日お話ししていただいた皆さん方に、そして会場でうなずいたり手をたたいたり質問していただいた皆さんにお礼を申し上げたいと思います。

オールドニュータウンのオールドはいけないという話がありますが、まちというのはどちらでしょう。新しければ新しいほどいいのか、それとも熟成させるものでしょうか。やはりまちはウイスキーと一緒に時間を経つとますますおいしくなると思います。今日、長年住んだ方は皆さんそう言われていて、その通りだというふうに思います。

県の方で3年ぐらい前からいろいろな計画をつくり、私もそのお手伝いをしてきたのですが、特にその中で、新しい力にぜひ入ってほしいということで、一つはNPOにもっと力を出してほしいということがありました。いささか実験的であり、本当に効果があがるのだろうかとか危ぶむ声も無かったわけではありませんが、たとえば場所を提供する、あるいは神戸まちづくり研究所にこういう企画をしていただきました。ボランティアでも行政やコンサルでもなく、その中間にあって専門的な力を持ち、そしてこういうことをぜひ実現したいというミッションにあふれている団体に来てほしいということです。もう一つは外部の方のお話を聞くということです。オールドニュータウンは皆同じ問題を抱えているので、たとえば東京や千里でどうということが試みられているかということも、その都度勉強し、あるいは経験を聞き交流するというお招きしてきました。今日もその一つですが、どこも同じ問題を抱えて同じ悩みに挑戦していて非常に良かったと思います。

しかし、この先どうしたら良いのかがなかなか出てきません。ある程度素案は書けるのですが、そこから先が難しいのです。世の中も変わってきているわけで、先ほども指定管理者制度というお話がありました。東京のフュージョン長池さんが指定管理者に立候補して駄目だったようですが、むしろその報告を聞くと、どういう点に問題があり、どうすれば良かったのかということが良く分かります。このお話をしているのは、先ほど公園の管理で、大きなところは市が業者や外郭団体にやらせて、ボランティアが日常のことをやるというお話がありました。しかし今やもっと進んで、管理自体をNPOや企業がやるという指定管理者制度のように、制度が大きく変わりつつあります。これをNPOなり、あるいは企業とNPOがジョイントしてやる。というのは、企業が手を挙げて企業だけではできないのです。今ここでも実現しているように、日常の管理はボランティアにしてもらい、あるいは利用者の声を聞いて公園をつくり直していくには、住民の声を聞かなければならないのですが、これは企業にはできません。それをNPOやボランティアがどう一緒に組んで実現していくのかということです。今までですと、安全第一で、木を切ったら危ないというのは当たり前ですが、公園の管理者は多分1本も切るなど言います。そこから崩れると管理者の責任だと考えると、管理者としてそういう答えにならざるを得ないのです。その結果、夜は暗くて通れないような公園になります。千里の街角広場へ駅から歩いてくる道がそうなりかけています。最近ベルを押すと大手前の府警に電話が通じるというものをつくったのですが、緊急時にそこへつながってどうするのでしょうか。住民のことより、施設や設備をどう運営すればいい

かということになるとこんな結果になってしまいます。

もう一つ同じ問題ですが、このセンタービルの建替えや団地の建替えの計画がありますが、答えが出てからでは間に合わないのです。今PFIでいろいろな業者にやらせていますが、こうなりましたので皆さんのご意見を聞きたいということではなくて、むしろ答えをつくる段階で、たとえば楽しみが無いではないかとか、あるいは年寄りはどこへ行けばいいのかとか、そういうことはむしろ計画の段階で織り込まなければいけません。要するに、使用する側の声を反映しないとイケない。先ほど指定管理者制度に切り替わるといってお話をしました。公民館や児童館など、そういうものが皆切り替わるのですが、どういう仕様でやるということは、行政の内部だけで検討しているわけです。これですと、出てきた結果だけを見て、自分たちの声はどう反映するのかということになってしまいます。そういう意味で、住民の声が計画の立案段階から反映されるような仕組みを考えていく必要があります。これには時間が限られています。今日は非常に深刻な問題を含めてお話を聞かせていただきましたが、今考えている計画の中に、こういうことが充分反映されているかを、まずは発言していただきたい。立派な報告書が出てきていますが、住民の側から言うと、これはどうなるのということになりかねないと思います。そういう意味で、今日の集まりで交わされた議論が次のステップに生かされ、住民にとって本当に住みよいまちをつくる第一歩になり、日本のオールドニュータウンの第1号であり、そして新しく熟成されるニュータウンの模範になるような形で進めていただければ大変ありがたいと思っています。

あらためて、今日のシンポジウムを開くについて、いろいろ準備していただいた県の皆様始め、関係者の皆様にお礼を申し上げたいと思います。私もこの40年前の映画があるのを全然知りませんでした。ほとんどどなたもご存知無かったのではないかと思います。今日おいでの県OBの方のあったはずだという一言を頼りに、実は東京に保管されていたのを発掘されてきました。随分目に見えないところで努力していただきました。重ねて御礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

6. 閉会挨拶（小島彰夫：松が丘校区連合自治会会長）

今日は、「元気な街であり続けるために」というまちづくりのシンポジウムでしたが、最初に明舞団地がどのようにしてできてきたか、現在どういう問題を抱えているか、あるいは今後の課題や展望ということで、ビデオ上映と住宅地課の原田さんから説明がありました。その後、小荒井さんから多摩ニュータウンの再生というお話がありました。建物の老朽化、少子高齢化、行政区が異なる問題、あるいは民間移行の問題などを聞きながら、内容的には多分違うのだと思いますが、项目的にはこの団地が抱えている問題と同じようなことがあるのだなと感じさせていただきました。

松が丘校区連合自治会では、昨年度から、住民の住民による住民のためのまちづくりということでまち調べを進めています。調査内容が非常にたくさんありますので、今年は委員会を設立して、辻先生にも5回ほど来ていただき整理しました。先日やっと整理ができて、明石市へ要請する予定にしています。当然ながら協働参画ということで、住民も参加するということも含めて要請したいと思っています。

ここは神戸市と明石市とに分かれていまして、私も松が丘校区連合自治会は松が丘校区のことを一生懸命やっているわけです。明舞団地は県が管理しているところもありますし、公団が管理しているところもありますので、明石市に要請すると、当然のことながら県とも関連してきます。そうなりますと、明舞の多聞台や狩口台などの方と連携して取り組んでいかなければなりません。協働関係にならざるを得ないと思っていますので、我々も頑張ってやっていきますので、今後ともいろいろとお教えもいただき、ご協力もいただいて進めたいと思いますので、よろしく願いいたします。

今日は本当にありがとうございました。